＜創立10周年記念特集・第2部＞…その1

資材価格の上昇で農家経済は厳しさ続こう

——昭和54年度農業観測の概要——

農林水産省大臣官房調査課
高　橋　善　一

農林水産省は，農業生産者と関係者に対して，農産物の生産，出荷と資材購入等に関する合理的な計画に資することを目的とした情報提供を行うため，農林水産統計観測審議会の審議を経て，昭和54年度農業観測を6月18日に公表した。

1.　農業をとりまく情勢

54年度の農業経済を見通すにあたって，以下の内外情勢を前提とした。

（国内経済）　内需を中心に景気の回復が期待されるとみる，54年度の政府経済見通しを前提として，農業観測を行った。つまり，実質経済成長率を6.3％前後，個人消費支出の伸びは名目で9％程度，鉱工業生産6％程度の伸び等である。

（農業就業人口）　53年度の農業就業人口は，雇用情勢が引き続き厳しい状況で推移したこともあって，年度間ではほぼ前年度並みの水準となった。

54年度については，雇用情勢に最近，所定外労働時間，有効求人倍率等の面で上向き傾向がみられるものの，急速な改善には至らないとみられ，農業就業人口は，老齢化による引退，自然減の出ることを考慮すれば，前年度に比べ若干の減少程度とみられる。

（耕地面積等）　53年の耕地の非農林業用途へのかい廃面積は，工場用地への転用は減少したが，道路，宅地等への転用増加で，前年に比べわずかな増加となった。

54年度は，民間設備投資，住宅投資の着実な増加，公共事業の実施等により土地需要が高まるとみられるので農地の非農林業用途へのかい廃面積は，前年度に引き続き，都市部を中心に増加傾向が続くものとみられる。

（農業資材価格）　53年度の農業生産資材価格は，円高による輸入原材料価格の下落等により，前年を下回って推移し，年度間では前年度を2.6％下回った。

54年度については，海外要因等に不確定要因はあるが，原油値上げ，円安傾向，一般卸売物価の動向等からみて，総じて強含みに推移するとみられ，年度間では前年度に比べ，わずかないしやや上昇するものと見通される。

（海外情勢）

(1)　1978／79年度の世界の穀物需給は，生産が高水準となったことから比較的緩和した推移となっている。小麦，飼料穀物の生産は，好天により史上最高になったとみられ，価格も比較的安定して推移している。大豆生産も史上最高とみられるが，需要が根強いこともあって，価格は比較的堅調な推移となっている。

(2)　1979／80年度の小麦，飼料穀物の生産については，作付動向，天候等になお不確定な面が多いが，前年度の豊作が主に記録的な単位当たり収量の増加であることを考慮すれば，今後の天候の推移によっては，前年度を下回る可能性もある。大豆は，価格が比較的有利な水準にあること等を反映して，作付けは増加するものとみられ，大きな不作がないものとすれば，生産は前年度を更に上回ると見込まれる。

2.　農業経済の見通し

（農産物需要）　個人消費の緩やかな伸びの中で，食料消費は伸び悩んでいる。「家計調査」による非農家世

第1表　昭和54年度農業観測総括表

	単位	実数又は指数			対前年度増減(△)率(%)			54年度見通し
		51年度	52	53(概数)	51年度	52	53(概数)	
実質飲食費支出	千億円	178	185	191	1.5	3.9	3程度	前年度と同程度の伸び
農業生産	50年度＝100	97.3	104.8	105.4	△ 2.7	7.7	0.6	ほぼ前年度並み
農産物価格	50年度＝100	109.5	108.7	113.7	9.5	△ 0.7	4.6	米、麦を除く総合ではほぼ前年度並み
農業生産資材価格	50年度＝100	104.6	107.1	104.4	4.6	2.4	△ 2.5	前年度をわずかないしやや上回る

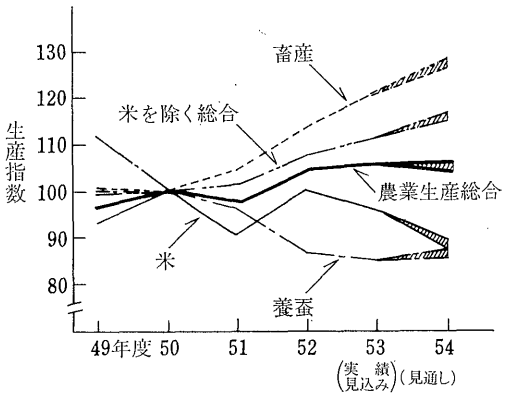
＜創立10周年記念特集第2部＞

§ 資材価格の上昇で農家経済は厳しさ続こう…(7)
農林水産省大臣官房調査課　高橋善一
§ 畑（転換畑を含む）の土づくりと施肥法……(9)
農林水産省農事試験場畑作部畑土壌肥料研究室長　草野　秀
§ 牧草の硫黄，塩素含量と硫黄欠乏……(11)
農林水産省草地試験場土壌肥料第2研究室・主任研究官　辻　藤吾
§ 野菜土壌と肥沃度……(13)
農林水産省野菜試験場環境部土壌肥料研究室長　湯村義男
§ 早生温州ハウス栽培の技術的問題点……(15)
愛媛県果樹試験場南予分場・研究員　西山富久

帯1人当たり実質食料費は，53年も0.3％増にとどまった。

54年度の食料消費については，個人消費は緩やかな増加とみられること，食料品の消費者価格はおおむね安定して推移するとみられること等を考慮すれば，ほぼ前年度並みの伸びとみられる。

農業生産の動向（指数50年度＝100）



（農業生産）　53年度の農業生産は，畜産生産については増勢鈍化ながら6.6％程度増加した反面，耕種生産については麦，大豆等で増加したが，米，果実等が減少したため2％程度減少し，総合では前年度に比べ0.6％程度増加した。

54年度は，①畜産生産は総じて増加傾向が続くものの，その伸びは鈍化するとみられ，②耕種生産（作柄を平年並みとみた場合）は，麦類，大豆および前年不作であった果実等で増加が見込まれるが，米等の減少から前年度に比べわずかないしやや減少するものと見込まれる。

このため，農業生産全体ではほぼ前年度並み，米を除く農業生産は4％程度の増加が見込まれる。

（農産物価格）　53年度の農産物価格は，コスト面からの上昇要因は一層小さくなり，需給も総じて緩和基調で推移し，更に行政価格もすえ置きないし小幅な引上げに止まったため，前年度に比べ4.6％の上昇となった。

54年度については，需給面からみれば，需要は緩やかな増加とみられるのに対して，供給は緩和傾向で推移するとみられることから，需給面での価格上昇要因は乏しいものとなっている。一方，コスト面からみれば，農業生産資材価格が強含みに推移するとみられ，価格の上昇要因は強まるものとみられる。

以上のことから，54年度の農産物価格は，個々の農産物により価格形成のメカニズムは異なるが，市場で価格形成される農産物価格は総じて弱含みとみられ，米，麦を除く農産物総合ではほぼ前年度並みの水準と見通される。主要農産物の見通しは表―2のとおりである。

（農家経済）　53年度の農家経済については，気象等一時的要因から果実等の価格上昇はあったが，農業粗収益は前年度比3.7％増にとどまり，他方，農業経営費は資材価格の下落もあって同4.0％増であったことから，農業所得は同3.5％増であった。また，農外所得は同7.7％増と伸びが鈍化した。

なお，近年の動向を概観すれば，農業所得は，農産物価格を需給面から押し上げる要因が乏しくなっており，大きな伸びは見込めない状況が続いている。また，農外所得は，一般賃金の動向にほぼ見合った伸びをみせているが，その伸びは鈍化傾向にある。このように，近年の農家経済は総じて厳しい状況が続いている。

54年度農産物価格は，米，麦を除いてほぼ前年度並みの水準にとどまるとみられる反面，農業生産資材価格は前年度水準をわずかないしやや上回るとみられる。この結果，前年度に資材価格の下落もあって上回った農業交易条件指数はやや低下しよう。また，農外所得は，雇用情勢等を考慮すればほぼ前年度並みの伸びとみられる。

以上からみて，54年度の農家経済は，農家の性格，経営形態等により異なろうが，厳しい状況が見込まれ，農業機械等固定資本に対する農家の投資態度は引き続き慎重なものとなろう。

表―2　昭和54年度主要農産物価格の見通し（単位：卸売価格）

	実数又は指数			対前年度増減(△)率(%)			54年度見通し
	51年度	52	53(概数)	51年度	52	53(概数)	
牛肉(乳雄)	1,317	1,251	1,310	△ 0.9	△ 5.0	4.7	ほぼ前年度並みで安定価格帯の中で推移
豚肉	729	736	682	△ 7.4	1.0	△ 7.3	前年度をやや下回るが安定価格帯の中で推移
ブロイラー	344	319	288	1.2	△ 7.3	△ 9.7	ほぼ前年度並み
鶏卵	278	267	227	2.2	△ 3.9	△ 15.0	前年度をやや下回る
みかん	136	106	140	50.9	△ 21.6	28.9	前年同期をかなり大きく下回る
りんご	231	189	261	10.2	△ 18.1	45.8	前年同期をかなり大きく下回る
ぶどう	450	486	514	△ 4.7	8.0	5.8	ほぼ前年同期並み
野菜	132	125	129	9.1	△ 5.3	3.2	春野菜は前年同期をやや下回り、夏秋野菜はかなり下回り、秋冬野菜はかなり上回る
繭	1,820	1,944	2,268	10.1	6.8	16.7	前年度をやや上回る